

「白いぼうし」（あまんきみこ）の実践報告

<第三項>論の授業の<現在>について

児童言語研究会 三輪民子

1 授業実践から考える<第三項>論を世界観認識とする「白いぼうし」の読みの問題

① 「登場人物にとって『白いぼうし』はどのような存在か」という問い

・「命」(p. 17 C5)の問題に行きつかせたことで、「世界を捉える自己を根源的に問う」ことができた →この作品における「白いぼうし」の存在をどのように読むか

松井さんが白いぼうしを振り回した行為を人間共同体の罪の典型として捉えない。

「白いぼうし」は、結果的にチョウを助け、愛情のこもった（松井さん、その母親）夏みかんを男の子に届けることになる。その結果、松井さんをチョウの世界へと誘う。夏みかんが温かさの象徴とするなら、白いぼうしはその仕掛け（橋渡し）役といえる。

② 「松井さんにだけチョウたちの声が聞こえたのなぜか」という問い

・チョウの声が聞こえることの意味を男の子などのまなざしと関連づけながら読むことが肝要だった。C10 (p. 19) の発言をとりあげることで、「人間共同体の罪の問題を超えて、<語り手>がそれぞれの生の温もりを如何に語っているのかに直接的に迫ることができた」とする。

→不思議な女の子に連れてこられた「小さな団地の前の小さな野原」に飛び交う白いチョウたちの踊るような光景と松井さんには聞こえてきた声をどう読むか。

松井さんが車の窓から見た光景は、都市化が進む中に残された小さな野原で喜びを分かち合うようなチョウの群れであり、小さな小さな声である。松井さんはそれを見ているうちに、おそらく逃げたチョウをそこに見たかのように思うがゆえに聞こえてきた声ではないだろうか。かすかに匂う夏みかんの香は、男の子にとってもよかったと思える光景に違いない、と語られているようだ。愛情のこもった夏みかんの温かさに包まれているようでもある。これは、私の読みであって、この光景を想像豊かに考えさせたい。

「現実」と「非現実」の設定については、この2つの世界の出入りの往還が基本となっていて、「非現実」を取り入れることで真実を描き出す。

③ 子どもたちから出た「夏みかん」の存在についての読み

C6 は、作品の最初と最後に夏みかんが出ていることを指摘し、夏みかんの存在の大きさについて子どもたちの発言を通して捉えている。C3 は、そこから「命」のことをつなげようとするが、うまく言えないままで終わる。

④ 授業展開の問題点

- ・教師の読みに誘導された展開（特に、チョウや松井さんにとっての「白いぼうし」）が目立つ。
- ・ことば表現（松井さんの場合は、「ぼうしをふり回した」表現にのみ）に着目することが少なく、抽象的で観念的な発言になりがち。松井さんの人物像も一面的。
- ・登場人物にとっての「白いぼうし」の問いは、ありきたりな答しか引き出せず、男の子とチョウの比較も単純化、一般化され、読みが限定されて広がらない。

⑤ <第三項>論を世界認識とする考え方について

- ・視点人物の松井さんのまなざしを超える読みはできないだろうか。各人物を対象化すること、読み手自身をも対象化する読み、語り手の語りから想像することなど可能であり、作品世界の<外部>を設定しなくても作品世界の創造ができる。
- ・「読者が客体として存在する『語とその連鎖』としての文章に意味を与え、文脈を形成するのが<読み>であって、言語的資材である「元の文章」自体には、読む前も、読まれた後も意味はない。読者が意味を与えることで、読者の内に「本文」として現象するだけだ。だから、『元の文章』には、幾度も返ることができ、そのたびに意味を与えることで、『本文 1』『本文 2』『本文 3』…を生成し、現象させる一と考える。しかし、これも、田近の仮説でしかない」（田近洵一 2013）

2 児言研が創る文学の授業

- ・文学の授業の出発（基本）は、読むことの楽しさ（教材との出会い・豊かな文学体験）と自由な読みにある。
- ・子どもが自ら能動的に文章に働きかけて読むことで生じる表象、感覚、感情、考え、感想などを尊重する。個々の読みを認め合う。
- ・視点人物、語り手、レトリックなどにも注目させながら、読み手意識を重視する。
- ・「話し合い」を通して、個々（他者）の読みに出会い、作品世界が拓かれるとともに読みの創造を図る。同時に個の読みの見直し、深化が行われる。
- ・教師の教材研究、教師の読みの深化を図る。